



Shamsul A.B. *From British to Bumiputera Rule: Local Politics and Rural Development in Peninsular Malaysia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1986, 282 pp.

人類学的村落事例研究をもとに理論的一般化をはかろうとする場合、従来の接近方法では、全体社会の文化的ミニチュアを研究対象村落の中に求めることが多かった。C. ギアツの『ジャワの宗教』などは古典的な例である。シャムスルの接近法は、近年イギリスやオーストラリアの研究者の間に見られるように、研究対象村落を全体の社会的、場合によっては世界的コンテクストのなかに位置付け、時間軸を分析の中心に据えることにより、経済と政治の相互作用の形のなかに、村落調査結果の一般化を試みようとするものである。著者の言葉を借りれば、「これは単にマレー村落に関する相変わらずの研究 (another study) ではない。むしろ、これは、一つのマレー農村にみるマレーシアについての研究である」(p. 6) (強調点は評者)。

本書の舞台は、今世紀初頭に開拓されたスランゴールのチュンパカ村 (仮名) である。記述は村の開拓以前にさかのぼるイギリス植民地政策の分析から始まり、1980年代初頭までのチュンパカ村の政治経済史を通観する。人類学の参与法に基づくデータや植民地文書、政府出版物は勿論のこと、開発プロジェクトの配分をめぐる村や地区レベルの種々の委員会の議事録など、公開、非公開のデータが縦横に駆使されている。現在、マレーシアでは OSA (Official Secrets Act) のため、役所でのデータ入手が困難になっており、使用されているデータ源の豊富さだけをとってみても、本書を超えるマレーシア村落研究は、ここ当期期待することはできないだろう。

全体の構成は次の6章よりなる。1. 序章、2. スワンプから集落へ——チュンパカ村の形成と確立、3. 生計と社会区分——独立後のチュンパカ村における農業、職業、階級 (クラス)、4. 古い敵対関係、新しい対抗関係——チュンパカ村における地域利害と政治的対抗、5. プミプトゥラ政策の政

治——チュンパカ村における新経済政策下の開発恩典の分配、6. 結論。

序章では従来のマレーシア研究の簡潔なまとめと評価を行い、本書のサブタイトルであり、かつまた中心テーマでもある「地方政治」と「農村開発」を、マレーシア研究史のなかに位置付けている。第2章では、ゴム栽培の圧迫、米作推奨を軸とする植民地住民農業政策を念頭におきながら、荒蕪地に主として貧農層を中心に開拓されたチュンパカ村の生成を、とくに土地利用、土地所有を軸に1957年頃まで追っている。第3章は、第4、5章の前奏ともなる章で、独立後の政治、経済の動きを概観するとともに、村の人々を、職業や土地所有をもとに幾つかの階級に分類している。第4章は地方政治の中でのチュンパカ村政党政治史であり、第5章は1971年以降の新経済政策におけるマレー優先主義のもとで、地方政治の枠組みがどのように変化し、また種々の開発プロジェクトの分配・分捕りが地方の政治過程にいかに関与を与えてきたかが描かれている。最終章では第2章から5章までの手際よいまとめと、この村落調査を通じて新経済政策の10年間 (1971-82) をどのように特徴付けることができるかが語られている。

本書を一貫して流れるテーマは、英国植民地時代以来現在まで、中央の農村開発計画がいかに関与に影響を与えてきたかであり、最近のプミプトゥラ政策下の利権をめぐる政治動態など、読者をしていささか気が重くなるような説得力とデータの裏付けをもって、記述がなされている。

著者のテーマ立て、検証の仕方を高く評価しつつも、二、三疑問ないし今後の課題を指摘したい。一つは著者の語らない部分についてである。著者は村内の政治的ダイナミズムの源泉を多角的にとらえつつも (例えば個人的いさかい)、基本的には <チュンパカ村内のチュンパカ集落 = official-cum-elite class = 与党 UMNO> vs. <チュンパカ村内のアサル集落 = peasant class = イスラム政党 PAS> という対立関係の図式を分析の中心に置く。しかしながら、この図式にのらないに違いない多くの人々、例えば多数存在すると思われる非政党メンバーやチュンパカ集落の peasant class が、どのように政治過程と関わっているかは語られていない。

新経済政策後、村レベルにおいても国レベルに

においても、UMNO vs. PAS という対立よりは、UMNO 内の派閥の対立が顕著になってきた、というのが私の印象である。この傾向については本書の後半でも言及されているが、しかし記述の力点はあくまでも2政党の対立にある。それだけ PAS が、チュンパカ村では政治的に重要であるからにはほかならない。そこで、チュンパカ村の“代表性”の疑問が生じてくる。例えば、本書で構造的に分析されている対立は、チュンパカ村的状況に規定されているのではないか。つまり、チュンパカ村における対立の“階級的表現”は、PAS の存在に負うところが大きいのではないかという疑問である（いみじくも、第2章の叙述、PAS が存在しない植民地時代の叙述では、著者は階級ではなくグループという言葉多用する）。この意味で、調査地域でも例外的に強力な PAS 組織の存在するチュンパカ村を、著者がどうして調査村として選んだのか、そして、PAS の存在しない村では、対立のどのような階級的表現が予測できるのか、気になるところではある。

いずれにしても、歴史的分析の深さ・明晰さ、上述の使用データの幅、注にみるコメント付きの豊富な文献紹介など、1987/88年度のハリー・ベンダ賞に推されているだけの質と内容を備えた本であり、今後のマレーシア農村研究の一つの方向を示している。

(加藤 剛・東南ア研)

Cécile Barraud. *Tanebar-Evav: une société de maisons tournée vers le large*. Cambridge: Cambridge University Press. 1979, 283 pp.

この本は、Fondation de la Maison des Sciences de l'Homme と、Press Syndicate of the University of the共同のシリーズ、Atelier d'anthropologie sociale の第1冊である。扱われたのは、東インドネシア、マルク地域の、通常ケイ (Kei) 諸島と呼ばれる島嶼群の中の一つの島タネバール・エバブ (Tanebar-evav) 島である。20世紀初頭の Geurtiens の記述以来、そしてそれ以外何も知られていなかった東インドネシアのこの地域の、この様に詳細なモノグラフ

が出版されることは、たいへん喜ばしいことである。この書評では、本書に基づきタネバール・エバブの社会組織の要約を作成しながら、どのような分析が望ましいかを見て行きたい。

エバブはケイ諸島を指す自称であり、ケイは、他称である。タネバール・エバブとは、「ケイの中のタネバール」を意味する（タネバール諸島は、ケイ諸島の南方に位置する）。タネバール・エバブは、また、同時にその島の唯一の村落の名称でもある。そこには約600名の村人が住んでいる。

タネバール・エバブには、「社会」に相当する語が、二つ存在する。ロル (*lòr*) とハラトゥット (*haratut*) という二つの語である。この二つの語を使用しての「社会」の二つの捉え方を分析するのが、本書の一つのメイン・テーマである。

ハラトゥットは、聖なる「山」を中心に据えた概念である。ハラトゥットは、死者・生者を含めた村人の共同体であり、「山」そして「神」の権威に基づき、「山」に起源する法によって組織された「社会」である。神に対して、ハラトゥットとしての社会は、ヤナン（「子供」）として規定される。

ロルは、物理的な村落内のタモ (*tamo*) と呼ばれる場所を中心とする。それは、罪の概念に、言い換えれば、「慣習法」アダット (*adat*)、「法律」フクム (*hukum*)、そしてウィリン (*wilin*) と呼ばれる精霊達に対する関係で把握される。それら精霊達に対して、ロルとしての社会は、ヤナン・ドゥアン（「甥」）として規定される。

ハラトゥットの法は、タネバール・エバブに限られるのだが、ロルの法は、マルク全体に通用していると考えられている。言い換えれば、ハラトゥットとしての社会はそれ自身で完結しているのに対し、ロルとしての社会は、外へと開かれている、といえよう（外部と共通する「5の組」「9の組」の対立も、ロルとしての社会の中にもみられる）。

ハラトゥットとしてのタネバール・エバブ社会は、23のラハン（「家」）に分かれている。ラハンは、社会の基本単位であり、名付けられた父系の親族集団である。23のラハンは、多くの場合、更に二つに分けられる。下位分割は、リン・メル (*rin mel*「右側」) とリン・バリット (*rin balit*「左側」) と呼ばれ、「年少」/「年長」の対立において把握される。ラハンは九つのウブ (*ub*) に分けられる。ウブは、ワダール

(*wadar*) と呼ばれる9組の祖先崇拜と結び付いたグループである。土地を所有する等の機能は、ウブにはない。系譜は、実際にはたどられないが、ウブの成員は系譜的につながっていると信じられている。九つのウブは、三つのヤム (*yam*) に統合される。三つのヤムは村落の物理的三分割に対応する。ウブとは違い、成員同士の間系譜的つながりは、信じられていない。このラハンを基本単位とし、ウブ、ヤムそしてハラトゥットへと至るヒエラルキーをタネバール・エバブのドグマ的社会構造と呼ぼう。

ラハンは、このドグマ的社會構造をクロスするようにして、互いにいくつかの異なる種類の関係を持つ。それらの関係のいくつかは上位者／下位者(質的な違い)のコンポジションをもち、いくつかは、先行者／後行者(量的な違い)のコンポジションをもち、またいくつかは、まったく同等の関係を示唆する。本書は、これらの関係の持つ位階的意味、そして各々の関係に特有の交換の分析を続けて行なっている。

以上のラフな要約からも明らかなように、タネバール・エバブ社会は、社会の記述枠組みが非常に複雑である。本書は、この複雑な記述装置を巧みに整理して読者に伝えることに成功している。しかし、逆に、社会の記述装置の整理だけに終わってしまっているのも、また事実である。本書を読み終わって、博物館の陳列を見た後のような、あるいは、博物館の陳列物の説明を読んだ後のような感想を抱くのは評者のみではあるまい。本書で扱われているような社会の記述装置は、人類学者が質問をした時にのみ作動するわけではない(本書はそれに終始しているわけだが)。様々な事件をきっかけに様々な人物が各々の有する記述装置の一部、あるいはヴァージョンをもってシーンに登場することとなろう。そこにおいて様々な記述装置の再統合、あるいは、歪んだ世界(世界は、常に歪んでいる)と装置との間の調整が行われることとなる。欠けているものの一つは、その様な、記述装置の動態の記述・分析である。

(中川 敏・東南ア研)